北越雪譜 二編 夏

ル 4
3131
5

門 九
3131
巻 5

島田藏書

北越雪譜二編 巻二目録

○雪頽の難
○雪頽より熊を得る
○龍燈
○雪中の葬式
○芭蕉翁略傳
○芭蕉翁の遺墨
○化石溪
○たせ戎の容貌
○夜光の玉
○亀の化石
○行列進
○餅花
○天狗羅の始原
○斉の神祭事
○雪中の狼
○煉羊羹の起立
通計十六條

本舗近刻

○骨董集三編二巻 四編二巻

右醒齋京傳先生遺稿京山人百樹翁補訂

○和漢印章考三巻　百樹翁著

○女粧考前後六巻　仝

此書ハ上古より近古ふ至るまゝ古図を載古書を引て説を下し女の風俗ふ係りたる事ハ包羅輯載して餘こゝ〳〵旦国字の書ふまゝハ婦人乙夜の覽ふ供すゝ〳〵蓋茲本編雪譜の餘帋爰ふ有を以姑近刻二家の著目を挙伏請雲顧の諸賢刊ふ先るの竈評是祈

江戸　書賈　文溪堂　謹白

北越雪譜二編　巻二

北越　鈴木牧之　編選

江戸　京山人百樹　増修

○雪頽ふ熊を得

酉陽雑俎ふ云熊膽春ハ首ふ在り夏ハ腹ふ在り秋ハ左の足ふあり冬ハ右の足ふありといへ余試ふ獵師ふもとゝ問ふに熊の膽ハ常ふ腹ふありて四時同じといへり蓋漢土の熊ハ酉陽雑俎の説のごとくふや凡獵師山ふ入りて第一ふ欲る処の物熊なり一熊を得まゝハその皮とその膽と大ふ価もたゝかゝるゆゑふ獵師の欲るものもまた熊ハ猛く且ハ金五両以上ふいたるゆゑふ獵師の欲るものもまた熊ハ猛く且智ありて得ること易からぬ雪中の熊ハ皮も膽も常ふ倍すゆゑふ雪ふ穴居もとゝ尋ね捜し獵師ども力を戮せてもとゝ捕ふ種く

の術ある事初編に記せりたまく一熊を得るとも其皮に價と分も乏利得薄しさまでに雪中の熊は一人の力にて得事難しとぞ○茲に吾が住近在に后谷村といふあり此村の弥左エ門といふ農夫老たる双親年頃のねがひよまつせ秋のとしごめ信州善光寺へ参詣させけりさてある日用あつて二里ばかりの所へゆきたる留守隣家の者過て火を出さしたちまち軒ふうつりけるに弥左エ門が妻二人の小児をつれて逃去て命一ツを助りくるのみ家財はのこらず目前の烟となりぬ弥左エ門は村ふ火災ありときいて走飯りしに家は灰となりてたゞ妻子の无事をよろこぶのみ此夫婦心正直にして親ふも孝心ある者なれ人こぞを憐みまづもてらく我が家ふ居るべきもの奨る富農もあつけるがつまりは奴僕の業をなすとても恩に報ゆべきは双親飯り来りて

賜はる双て人の家に在らんは心も安からずとて諾ず竊に田地を分く質入をしてその金にて假に家を作り親も飯つて住けり草を刈鎌をさへ買求るほどありけるに火の為に貧くなりしに家を焼る隣家一對して一言の恨をいふ事なく交り親むこと常よりもまさりかくてその年もくれて翌年の二月のすゑ此弥左エ門山に入て薪を取りしに谷に落る雪頽の雪の中にあきらかに黒き物有遥にこれを視てやはり人のなるべしとうつくしく死しかるゆゑと辛じて谷よりこれを負ひ稀有の大熊雪頽に打殺されたるなりけり此雪頽といふ事初編にもくわしく記せるごとく山に積りたる雪二丈にもあまるゆゑ春の陽気に下よりとけて自然に碎け落る事大磐石を轉ばしたるが如しこれに遇ば人馬いさらず大木大石もうちおとされるさまなれば此熊もこれにあつまりもてくる所なり弥ざるもんはよきものをつけくれたと大に悦びはこと

臕もとらんとおもひしが日も西に傾きければ明日きたらんとて人の見つけざる所に山刀にて熊を雪に埋めかくし心に目ぢるしゝて家にかへり親にもかたりてよろこばせ次のあした皮を剥ぐ用意をなしてかしこにいたりしに臕は常に倍して大なりしゆゑ弁当の面桶に入れて持かへりしに或人ありて皮を金一両臕を九両に買ひたるゆゑおもはず十両の金を得て質入せし田地をもうけもどしそれより屡幸ありてたびたび家もあらたに作りたていぜんに富まさりて栄けり弥左エ門が雪頽に熊を得たるは金一釜を掘得たる孝子にも比すべく年頃の孝心を天のあはれみ玉ひしならんと人々賞しけりと友人谷鶯翁がかたりき

○雪頽の難

吾が住塩沢は下組六十八ケ村の郷元なれば郷元を預り知る家には

古来の記録も残れり其は旧記の中に元文五年庚申（今より百年まへ）正月廿三日暁湯沢村の枝村掘切村の后の山より雪頽不意に押落し其響百雷の如く百姓彦右エ門浅右エ門の両家なだれにうたれし家つぶれ彦右エ門并に馬一疋即死妻と嗣息は半死半生浅右エ門は父子即死妻は梁の下に壓れて死にいたらず此時　御領主より彦右エ門息へ米五俵浅右エ門妻へ米五俵賜し事を記しあり此魚沼郡は大郡にて　会津侯御預りの地なり元文の昔も今も御領内の人民を憐玉ふ事仰ぐべく尊むべし。そのありがたさを吾が后にも示さんとて筆の序にしるせり近年は山家の人家を作るに此雪頽を避て地を計るゆゑにその難まれなれども山道を往来する時なだれにうたれて死する者の間ある事なり初編にもいへるが如く

○ホウラは冬にあり雪頽は春にあり他国の人越後に来りて山

下と往来せざホウラあぐまを用心まぐ〜他国の人ゑまぶ死〜たる石塔今も所〻ふありおそるべし〜

○雪中の葬式

吾が国ふ雪吹といふハ猛風不意ふ起りて高山平原の雪を吹散し〜その風四方ふふきめぐ〜て寒雪百万の箭を飛ぶ如く寸隙の間をも許さぐふきいるゆゑまりて往来の人ハ通身雪ふ射まて少時ふ半身雪ふ埋まて凍死する夏まくまもいてぐごと〜炊ふぐきハ晴天なも俄ふおそろ二日も三日も雪あまし〜てふぐきある事あり往来もこまぐ為ふらまること毎年あり炊時ふ臨て死亡せしもの雪あれのやむを待も程のあるものゆゑせんくまく雪ゐれ炊犯て棺を出す事あり施主ハいろゆゑふもたのぶきろ他人乃困苦事見るもきのどくありろれ雪国ふ一ツの苦状といつべし我江

戸ふ逗留せ〜ろろ旅宿のちろきあくろふ死亡ありて葬式の見嵐なるふ宿の主もこまぐふ往とて雨具きび〜くゆ〜ちく〜今日の仏いろゐる因果ものぞやかる嵐ふ値て人ふ難義をかるぐふまいとても極楽ハゆるまじあどつぶやきて立いづるを見て吾が国の雪吹ふ比ぶまバいと安〜とおもふて

○龍燈

筑紫の方ぬ火といふハ古哥ゆもあまたよそむ〜ゆりその名たくあまゆく人の方る所ありぬの蜃さまハ春暉が西遊記ふ方ぬ火を視たりと詳ふ方るセリ其方ぬ火とも世ふ竜燈のたぐひなるべし我国浦原郡ふ鎧潟と云里言ふ湖浅潟と云東西一里半南北一里の湖水ゆり毎年二月の中の午の日の夜酉の下刻より丑の刻須まで水上ふ火影を里人ハ鎧潟の万燈と云囃り現る人多〜余が友人豆をそるをきしみの

西道記ふ有るつしの有る火とおもひ出さまあり近年明水を北海へおそ一新田とあり西ゑ湖中の万燈も今人家の億燈とあまり又我国の八海山八巓ふ八ツの池あり依て山の名とす絶頂ふ八海大明神の社あり八月朔日を縁日とす山まの有る人多く此夜ふかぎりて竜燈あり甚奇る所と見る人なしとふおよそ竜燈とふあおれくさハ春夏秋あり諸国ふある事諸書ふ有るとを見ふいづれもおのづからさき海よりも出山よりもくだる毎年甚日甚刻限定りある事甚奇異あり竜神より神仏へ供と云ふ普通の説なりとあふ孫き竜燈の談ありかく竜燈を解べき説あるバ姑くあるて好事家の茶話ふ供す

我国頸城郡米山の麓ふ医王山米山寺ハ和同年中の創草あり山ふ薬師堂あり宵女全禁此米山の腰を米山嶺と越後北海の驛路あり此辺古跡多く余先年甚古跡を尋んとて下越後ふあそびし

時新道村の長飯塚知義の話ふ一年夏の頃雲のゐふ村の者ども数人米山へのぼりしふ薬師へ参詣の人山ごりをるためふ御鉢とふ所ふ小屋二ツあり其の小屋へ一宿あふ是日六月十二日ゑ此御鉢とふ所へ竜燈のある夜あり おりふまゝけぶりて竜燈をとる事よとて人ども数あり夜を明ふ西の刻と有る頃ゆゑくもりあつまりふ大なる八手鞠の如く小なる八雞卵の如く大小色ふ此御鉢とふあるきさりあつまりふ大なる八手鞠の如く小なる八雞卵の如く大小色ふ此御心ありて遊ぶが如く甚光り八螢火の色ふ似りつよくも光りよくもひるあり天井ひめぐりてちぐりくもとぐまるハあくあまさありてかぞへどもちぢめようふ小やの入口を閉人くひをまりて覗みるとべこふ人ありもちゐざるやうゑ大小の竜燈二ツ三ツ小屋の表へ七八間さきふ有ることきこしをかゞひふすヒこゑ形ち鳥のやうふ見えて光り咽の下より旗つやゝあり猛近くよりがかちもたしふ視ゑぐけんとおりひゝふちのくハよりぶしてゆやふ飛めぐり此夜山中

に一宿の心得なきが心用のために筒をも持せしに手たれの上手なりとも
若そのあかりが光を的にうけんとするを老人ありてやまてとおしとゞめあなかしこ
たゝりあらん此竜燈は竜神より薬師如来へさゝげ玉ふなり罰あたりなんと叱りける
声に竜燈はおどろきさるやうにてはるか遠く飛さりしと知義語りき

○芭蕉翁が遺墨

およそ越後の雪をよめる哥あまたあれども越雪を目前しらず
よめるはいまゝれなり 西行が山家集頓阿が草庵集にも越後の
雪の哥なし 此韻僧たちも越地の雪は志らざるゆゑなり 俊頼朝臣に
「降雪に谷の俤うづもれて梢ぞ冬の山路なりける」これらは実に越後
の雪の真景なれども此あたりの越後にきたりて見玉ひしにはあらず 俗に
いふ哥人は居ながら名所をしるなり 伊達政宗卿の御哥に
「さゝずとも誰かは越ん関の戸も降うづめたる雪の夕暮」又「ちるかく

につゞらとかよふ道絶て雪に隣のちかき山里」此君は御名たかくの
き哥仙にておはしましければかゝるめでたき御哥もありて人の
口碑にもつたふ雪の実境をよみ玉ひしはなかりしめきて 御国も深雪
なれば也 芭蕉翁が奥に行脚のかへるさ越後に入り新潟にて
「海に降る雨や恋しきうき身宿」寺泊にて「荒海や佐渡に
横ふ天の川」これ夏秋の遊杖にて越後の雪を見ざる事必せり
されば近来も越地に遊ぶ文人墨客あまたあれど秋のすゑにいたれ
ば雪をおそれて故郷へ逃皈るゆゑ越雪の詩哥もなく紀行
もなし 稀には他国の人越後に雪中するも文雅なきは筆にのこ
す事なし 吾が国三条の人崑崙山人北越奇談を出板せしが（六巻絵入の本）
（文化八年板）一辞半言も雪の事をしるさず 今文運盛にして新板湧がご
とくなれども日本第一の大雪なる越後の雪を記したる書

芭蕉翁訪凍雲図

涼雲を
たのみて
巣籠す
いつまでか
蚊帳
北斎

ふ〜ゆるゝよ吾ゞ不学をも忘れて越雪の奇状奇蹟を記し
後来よ示〜且越地ふ係り〜事ハ姑く載て好事の話柄とす
さて元禄の頃高田の御城下ふ細井昌庵といひ〜医師ありけり
一ふ青庵といひ俳諧を善〜て号を凍雲といひ〜せたる翁
與羽あんぎやのゝ凍雲をたゞ徐て「菜棚よりいでしの花を草枕」と
発句まつけもバ凍雲ともあ(ず)「萩のすゞをを巻あゞる月」此時の
たせ(ゆ)が肉筆二枚ありて一枚ハ昼損と覚〜く淡墨をもつて一抹乃
痕あり二枚ともふ昌庵主の家ふつゝ〜を后ふ本昏ハ同所の親族
三崎屋吉兵衛の家ふつゝ〜昏損のハ同所五智如来の寺ふのこるりゝ
るふ文政のころ此地の　邦君扈雅とこの〜王ひ〜ゆゑかの二枚持主よ
ゝ奉りけもバ吉兵ゑ〜常信の三幅對よ白銀五枚りの寺「もあつき賜あ
りて今二枚ともふ　御藏とありめと友人葵亭翁がものがゝり〜つ

葵亭翁ハ蒲原郡加茂明神の徭験宮本院名ハ義方吐醋と号し
又無方斎と別号ゝて隠居〜て葵亭といゝ和渙の博識北越の聞人
あり芭蕉ゞ件の句ものふ見えざるとハいゝるせり
百樹曰芭蕉居士ハ寛永廿年伊賀の上野藤堂新七郎殿の
藩ふ生る次男あり寛文六年歳廿四もゝて仕絆を辞〜京ふいでゝ季吟
翁の門ふ入り昏を北向雲竹ふ学ふたゝめ宗房といゝ季吟翁の
句集のものふも宗房とあり延宝のすゑゝめて江戸ふ来り杉風が
家ふ寄小田原町鯉屋藤左ヱ門剃髪〜て素宣といゝり桃青ハ后の名ふあり
芭蕉とハ草庵ふ芭蕉を植〜ゆゑ人よりよびゝる名の后ふハ自号
ふゝゞり翁の作ふ芭蕉と移辞といふ文ありその終りの辞ふ「たまく
花さくも花ゆゑふらず芦太けもども斧ふあゝらずかの山中不材の
類木ふたゞ〜てその性よ〜僧懐素ハ是ふ筆を走らし張横渠と

新葉を見て修学の力とせしあり予その二ツをとらずたゞ此蔭より遊びて風雨ふ破を易きを愛す「たゝせ川野分して盥ふ雨をきく夜ふ」此芭蕉庵の旧蹟ハ深川清澄町万年橋の南詰ふ対ひる今或侯の庭中ふ在り古池の趾今ふ存せりとて（余芭蕉年表一名たゝせ川年代記とゝふめを作せり昏津刺とも考証未定ゆえに刺とやるべきず）翁身を世外ふ置て四方ふ雲水〜江戸ふ趾をとゞめず終ふハ元禄七年甲戌十月十二日「旅ふ病て夢ハ枯野をかけ廻る」の一句をのこして浪花の花屋ゞ旅囱ふ客死せり是世の知る処あり翁ゞ臨終の事ハ江州粟津の義仲寺ふのこ〜こる榎木其角ゞ芭蕉終焉記ふ目前視るゞ如くふ記せり此記を視るふ翁いとゝ菌毒ふあこりて痢とあり九月晦日より病ふ臥僅ふ十二日ふして下泉せり此時病床の下ふあり門人ふ木節（翁ふ薬をあたる医なり）ふ去来。惟然。正秀。之道。支考。呑舟。丈草。乙州。伽香以上十人あり其角ハ此時和泉の淡の輪ふ在りて病ともたゝずして十日ふ帰り十二日の臨終ふ遇て奇遇といつべし（以上終焉記を摘要せり）其角ゞ終焉記の文中ふ（此記義仲寺ふ施板ありて人のもふ又キ角ゞかれをおあるよ）『義仲寺ゆうつして葬礼義信を尽し京大坂大津膳所の連衆彼官従者までも此翁の墳墓ふ来る者三百余人あり浄衣その外智月と（百樹云大津の米屋の母翁の門人）乙州ゞ妻縫たてゝ着せまゐらす』又曰『三千餘人の門葉辺遠ひとつふ合信する因と縁との不可思議いかもゝ勘破ゞ』百樹おもうらく孔子ふ三千の門人ありて門ふ十哲をいゞす芭蕉ふ二千の門葉ありて庵ふ十哲とよぶ門人ありて至善の大道と遊藝の小技と尊卑の雲泥ハ論ふおよばざれども孔子七十ふして魯国の城北泗上ふ葬て心喪と服する弟

子三千人芭蕉五十二ゆゑして粟津の義仲寺ゑ葬る時招ざる
ゑ来る者三百餘人是以人ゑ師ゑるの徳あゝをおもふべし
盍芭蕉の盆石ゑ孔夫子の泰山ゑ似るをいふまり芭蕉曽駐俭
の風軽薄の習少しもあらゝしゝ吟咏文章ゑてもちらる狄翁ハ
其角ゑいひしごとく人の推薦ゑる事今ゑ於も不可思議の奇人
ありされば一句一章といへども人こゝ戔句碑ゑ作りて不朽ゑ傳ふ
る事今猶句碑のあらざる国ゑ吟海の幸祥詞林の福禎文
藻ゑ於て狄人の右ゑ出る者ゑしさゝば本文ゑもいるまでくかりそあ
ゑいひもてゝる茶橘の一句の墨痕も百四十余年の后ゑいたりて
文政の頃白銀の光りをたもつべゝ論外不思議といふべし
蜀山先生嘗謂予曰凡文墨とゆて世ゑ遊ぶ者再ハ論せず死後
よいゝゝ一字一百銭ゑ当らゝ身ともゝゝ文雅幸福足べしとゆて

ゆゝき狄先生ハ今其幸福あり一字一百銭ゑ当らゝ事嗟乎難れ
○さてまゝ芭蕉ゑ行状小傳ハ諸昏ゑ散見して普く人の知る
所ありまゝもとも翁の容貌ハ挙世知る人あるべゝゝゝさるべ姿ゑ
一証を得るゆゑ狄雪譜ゑ記載して后来ゑ示をいかゝる瑣談も
世ゑ埋滅せん事のをしけるべいざ狀ゑとて雪ゑ摶す筆の老婆心
あり○ちゝゑ二代目市川團十郎初代段十郎（のち團ゑ改む）の俳号を嗣で
才牛とゝゑ后ゑ柏莚とあらたむ（元文元年あり）狄柏莚ハ。宝徳。享保。元文
○寛保ゑ盛ゑ歴ゝる名人あり妻をおさんといい俳名を翠仙とゝ
夫婦ともゑ俳諧を能しゝ文雅を好り狄柏莚ゑ日記のやうゑ昏
残したる老の楽といふ随筆あり（二百四十余年の自筆あり）嘗梱外一山さゝゝし
を狂哥坐真顔翁珠昏ゑ書ゑるべ懇望してかの家より借りる時
余も亡兄とともゑ読しことありきそのちゝゑ芝居土用やきそのの

うち柏莚一蝶が引船の絵の小屏風と風入まとする旁みて人
參をきぐ〳〵ちぐら炑繪ふむかをおゆいぐぶ〜て独言いひる
を記〜〜る文ふ「我ま幼年の頃ぐじめて吉原を見〜る時黒
羽二重ょ三升の紋つけるふり袖を着て右の手を一蝶ゆひ
ま左りと其角ゆむ〜まて日本堤を往〜事今ふ忘ず炑ふり
い世ふ名をひぐうせ〜れど今ハかなき人あり我い幸ふ世ふありて名
もま〜と頗る聞えぐり中略今日小川破笠老まゆらるむ〜の
ぐ〜せらまぐ〜るゆ〜ふ芭蕉翁いかぐおゆてうまぐいゆ〜ゆ白
く小兵ぐり常ふ茶のつむぎの羽織をきぐらまと嵐雪ょ其角が所
ついぐ〜るぐよとゆのぐづ〜ふいぐまて〜とぐ〜らまたり」珠文安政
を今目前ふ見るが如〜（翁の門人推然が作ぐ〜ょ翁の肖像あるひハ画幅の肖像世ょ流傳まるもの〜此説ぐあ〜せ視るべ〜）小川破笠俗称平助壮年の頃放蕩ゆて嵐雪と倶ふ（俗称服部彦兵衛）

其角が堀江町の居ふ食客たり〜事件の老の樂又破笠が
自記ゆも見ゆ破笠一ふ笠翁まと印觀子夢中庵等の号あ〜
絵を一蝶ふ学び俳諧ハ其角を師ぐて余が藏ぐる画幅ふ延享
三年丙寅仲春夢中庵笠翁八十有四華とあり描金を善〜て
人の粕をなめず別ふ一趣の奇工を為す破笠細工とて今ふ賞
せらる吉原の七月創て機燈と作りて今ふ其余波を殘り傳詳
ゆ〜ぐ〜ぐもさの〜ふとてゆ〜せり

○化石溪

東游記ょ越前国大野領の山中ふ化石溪あり何物ゆても半月あ
るひハ一ケ月炑溪ふ浸〜おけばかぐ〜ず石ふ化す器物いさらみり紙
一束藁ゆてむをびぐるが石ふ化ぐるを見ぐ〜と為ぐ〜せり我が越後ゆも
化石溪あり魚沼郡小出ぐの在羽川ぐ〜溪水（蚕の腐ぐると流〜ぐ

一夜ゐして石ゐ化したりと友人蓼亭翁がくらまきかの大野領の化石溪ハ東游記の為ゐ名高けれども我ゥ国の化石溪ハ世ゐそられず又近江の石亭ゥ雲根志変化の部ゐ前編人あり語云越後國大飯郡ゐ寒水滝といふあり此処深山幽谷ゐして冱寒の地なり此滝坪へ万物を投こめおくゐ百日を過ずして石ゐ化すとぞ滝坪の近所ゐて諸木の枝葉又ハ木の実その外生類までも石ゐ化するを得るとて予去る頃此滝の石を取よせ一人ありて見るに常の石ゐあらざる全脇鐘乳なり木の葉をも石中ゐふくむ則石なり雲林石譜ゐいふ鐘乳の摶化して石ゐなるゐらん云云牧之案るゐ越後ゐ大飯郡ゐ又寒水滝の名もきゝず人あり語るとあるとゐ傳聞の誤なるべし蓋北越奇談ゐ会津ゐ隣る駒ゥ岳の深谷ゐ入ること三里ゐして化石溪と名付る処あり虫羽草木といへども

溪ゐ入りて一年と歴ぬるもゐ化して石となる其川甚苦寒ゐして夏も渉べからざるゥ如し又蘓門岳の北下田郷の深谷ゐも化石溪あり云ふ雲根志の説ハこれらの所を聞誤るなるらん

○亀の化石

吾ゥ同郡岡の町の旧家村山藤左ヱ門ハ余ゥ壻の兄なり此家よ先代より秘蔵する亀の化石あり傳てハ近き山間の土中ゐ掘得たりゐ実ゐ化石の奇品なり茲ゐ図を挙て弄石家の鑒を俟百樹曰件の図戈視るゐ常ゐある亀とハ形状少し異ゐるゥ依て案るゐ本草ゐ所謂秦亀一名筮亀あるひハ山亀といふ俗ゐ石亀といふ物ゐやあらん秦亀ハ山中ゐ居るものなりゆえゐ呼で山亀といふ春夏ハ溪水ゐ遊び秋冬ハ山ゐ蔵る極て長寿なる亀ハ是なりとて又筮亀と一名なるハ周易ゐ亀を焼て占ひ

甲之図

蟹之化石

堅 曲尺五寸五分
横 四寸五分 厚二寸六分
重 八百目

腹之図

腹之図

〻の安亀ありとて件の亀の化石本草家の鑒定を得て素亀あるべ一層の珍を増〻山ふて掘得ることあるべ素亀ふちきもうちり化石といふものあまく見〻ふ多ハ小きものそあるひいまく休全も稀ありの図の化石ハ休全く且大ありの珍とすべ〻。余先年俗ふいふ大和めぐりをすること半月あまり京ふあるべ旧友の画家春琴子ふ就て諸名家をたづね〻時鴻儒の聞高き頼先生（名襄字子成山陽号通称頼徳大郎）も訪ひ坐談化石の事ふおよび先生余ふ蟹の化石一枚を恵その色枯ずして生ゞ如く堅硬ことい石ありの潜確類昏又本草三才図会等ふいとる石蟹泥沙と倶ふ化して石ふのりとるべ〻孟春もる石菖の下ふおくふ水中ふ動ゞ如〻亀の徒者ふ其図と出す是も今ハ名家の形見となりぬ

○夜光玉

雲根志灵異の部ふ曰予が隣家ふ壮勇の者あり儀兵衛といふ或時田上谷といふ山中ふ行て夜更て飯るふむりうある山の澗底より青く光り虹の如く昇てきるハ天ふ接る此男勇漢なれハ元二元三ふ草木を分けて山と越谷をくりてかの根元をさぐりるふたゞ何の異る事もあるき石ありひろひとりて背ふ負ひ飯るふ道もすがら光るもと前の如〻甚ゞ夜道の労をたすけり暁の頃我ゞ家ふ着ぬ件の石を軒の外ふ直〻置朝飯をぐもめて彼の石を見んとするふ石ふ〻いろふせ〻事やらんとさゞめくふたづみもとむれども行方をもずとあん又本国甲賀郡石原潮音寺和尚のかのぐりる近里の農人畑を拵居〻ふ拳ありるる石をりりいぐせり此石常の石よりハ甚ごうこようて取りかりぬ夜ふ入りて光ること流星の

如一友のいふ是霊石あり人の持ゆのふあらず家ふあるべ
しとやくわやぶりてもつぐ〳〵豆をきして斧とりて打碎くと竹
やぶの中にてこゝり其夜竹林一面ふ光る事数万の蛍火の如し翌
朝近里の人きつゝつゝ集り来り竹林をたづねゝふわしのぐ
までも一石も有る事あり又筑后国上妻郡の人用ありて夜中近
村へ行よ一ツの小川ありかちゝゝせしふるふやらん光る物あり拾ひ
とりてゝゝゝバ小石なり豆日さる方へ献ずもぐ〳〵くし笑うとぞ以上
一条 是等ハ他国の事なり我が越后ふも夜光の玉のあり〳〵事あり
全文
新発田より蒲原郡東北加治とゝふ所と中条といふ所の間路の傍田
の中よ庚申塚あり此塚の上ふ大さ一尺五寸ばかりの四石と鎮し
てこれを礼る此石ゝの先農夫屋の后の竹林を掃除して竹の根
をぐ掘るとてかの石一ツを掘得ゝゝその色青ゝありて黒く甚ぐ

あらゝゝまり農夫ゝゝをもつて藁をゝつ盤ゝふす其夜妻庭ふ
出ゝ〳〵ふ燦狀ゝて光る物あり妻妖怪なりとして驚叫家主壮夫
三五人を伴ひ来りて光る物を打ふ石なり皆もつて怪ゝ〳〵石と竹
林ふ捨つゝその石夜毎ふ光りあり村人はゝゝて夜行ものふ〳〵依て
此石を庚申塚ふ祭り上ふ泥土を塗て光をかくす今猶苔むして
あり好事の人この石をゝ〳〵ども村人祟あらん虞と慎てゆるゝゝぐとぞ
又駒ゞ岳の麓大湯村と杵尾村の間を流るゝ渓川を佐奈志川と
いふひゝゝせ渇水せ一頃水中ふ一点の光あり蛍の水よあるゞ如一
数日処を移さず一日暴雨よ水増て光り〳〵物所を失ふ后四五町川
下よ光りある物蛍火の如一此地山中ふきバ村夫等昏愚ゆゝく
夜光の玉ある事をもゝず敢てたづねもとむる者もあり〳〵ふ其秋
の洪水よ夜光の玉ふゝゝびあゞゝて所在を失ひ〳〵とぞ以上北越奇談の説 偖

茲ふ夜光珠の実事あり我文政二年夘の春下越後を歴遊せしとき三嶋郡ふ入り伊弥彦明神を拜旧知識あるまゝ高橋光則翁と尋しふ翁大ふよろこびて一宿を許しぬ翁和哥を善し且好古の癖ありて卓達の人なり雅談湧ぐ如くおもゝず節をとゞめ一事四五日あり一夕翁の語りけるゝ今より四五十年以前吉田の三島郡の内まゝりをゝり大島川といふ溪川ふ夜ゝ光りものありて人怖て近づくものなくゝふ坎川の近所ふ冨長村といふありけゝふ鍛冶の兄弟あり一ひとりの母と養ふ家最貧し坎兄弟剛気なるものゆゑかの光り物を見きわめ妖怪あるゝば退治して村のものどもゞ肝とむしぐんとする夜兄弟かゝふいとゝふをゝしも秋の頃水もまさり川面をゝるふ月暗くしてたゞ水の音をきくのみ両人炬をとりてゝゝてゝゝをとゝるふ光るものゝちらふくまゝ怪しむべきを

をゝずさて人のいふ人ハ空言あゝんいぎとして飯らんとまゝるふ水上俄ふ光明を放つまゝやとて両人衣服を脱ぎて水ふ飛入り泳ぎよりて光る物を探りけるふゝゝ枕ゝちる石ありけるまゝを取得て家ふ飯りまづ灶の下よ置しふ光り一室を照せりまゝぐのよりゝ母ふかゝりけるゝ不思議の室を得ゝとて親子よろこび近隣より来りけるをあゝしぶりのまゝゆ者どもあるゝゝ趙璧隨珠ともおもゝぎるうち過ゝりかゝて后弟別家まる時家の物二ツふ分ちて弟ふ与んゝ母のいふしふ弟ハ家財を望まで光る石を持去んとゝ兄がいゝく光る石を拾ひ得しハ我が企あり汝ハ我が力と助しのゝみあり光る石ハ親の譲ふあらず兄が物あり家財を分あゝばおやのゆづりとゝるべけまゝ与ふまゝゝ弟いふゝゝあの石ハおゝぶのありいんとゝるれば身ハ光る石を拾んとの企あゝず妖物と退治せんとて川い

文溪堂蔵

たりもん身よりハ我先よ川へ飛り光りものを探りあてるかづき
あげしも我あり志るとバおれらの志るひしを以持さらんふるふあらんや
く此兄ものもろ弟らの志るとと口論やまぬ終ハつゝあひ志ちの
ひしを母やりくゝとれしをづめ志ゝぶ光る石を二ツふ破りて分づゝと
いふ弟さらづて明王をとりいづゝ鍛冶志る鎖の上ふのせ鑰をもて
力ふまるせて打るとバをしむづゝ明王碎破内ふ白玉を弱ゝづゝ志も
碎け水ありて四方へ飛散るり其夜水のこゝ〳〵処光り輝く事蛍の群
志ゝぶ如くあるゝふ二三夜やゝてその光りも消失けりとでいふ頑愚の
手ふあるゝといひあるゝ稀世の宝玉鄙人の一槌をうけて亡びるハ
玉も人も倶ふ不幸志ふづゝと語らるとき牧之峯よ橋春暉ゞ著る
北囮瑣談後編の二藏石家の事志ふ條ふ曰江州山田の浦の木之内古
繋伊勢の山中甚作大坂の加嶋屋源太兵卫其外ゆも三都の中の

好事家侯國の逸人藏石ふ名の高き人近年夥ゝ余も諸家の
奇石を見ゝに皆一家の藏る処三千五千種ふいゝる五日十日の
日を尽ゝてやゝ〳〵眼をゝる支を得るふいゝるその多き中ふ
も格別ふ目をおどろ久すゝ石ゞの珍奇の物ハ无力のあり加嶋屋
源太兵卫ものゝゝりふ过ゝ年北国より人ありて拳の大さ乃
夜光の玉ありよゝ一室を照すよき價あゝバ賣んといひゝうゞ
即座ふ其人よ托ゝて曰其玉求たゝ暗夜ふその玉の入りる箱
の内ゞゝり白きゆゝふ見えゝ金五十両ふかゝむづゝ又その玉
ゆゝ闇夜ふ大ある文字一字ゆゝも読えゝまゝバ金百両ゆゝも
づゝ又昏狀よむゞゝ志バ三百金いよゝ一室をてらさバ吾ゞ
身上のこゝゝずの力を尽ゝて求むづゝ媒ゝて王るづゝと
いひゝゞゝちあゆの便も求ゝてやゝぬ空言ゆてありしと思る

云云　扨文段ハ天明年中藏石の世ふ流行たる頃加嶋屋ゞ話を
そのまゝふ春暉ゞ后よりたるゝるゝ　さて又余ゞかの鍛冶屋
ゞ玉のたゞきゝ　ハ文政二年の春あり今より四五十年以前
とあまべ鍛冶ゞ玉を碎きたるハ安永のするゝ天明のたゞめ
あるゝ狀りとまれば藏石の流行る頃ゆまゞかのゝじまやゞ
話ふ北國の人一室ゞ於てらす玉のうりものありしとひゝ我ゞ国の
縮商人あとぶかぢやの玉の支をきゝつゝく商ひ口をひゝわたろ
らゝとすゝるふ玉ハくゞきゝときゝてかゞまやゝ答へざりしゆや
あらんゝ和ゞ玉も楚王を得ゝまゞこて世ふもいでゝまゝ右ふのせ
たる夜光の話五ッあり三ッハ我ゞ越後ふあゝゝ事ゝありいづまも
世ふいでゝ嗟乎惜むゞゝ
百樹曰五雜組物の部ふ鍛冶屋ゞたゆゝふ類せる支あり

明の万曆の初閩中連江ゝの人蟹を剖て玉を得ゝまゝ
ゞも不識ゝるを京ふる珠釜の中に在て跳躍ゝて定ず火
光天ふ烛里人火事ゆゝと驚き来りてゝるゝ救ふ玉と京ふ
ゝるのゝのゆゑと聞て釜の蓋と啓て視ゝ已ふ玉ハ半枯ゝ
其珠徑一寸許吹真ふ夜光明月の珠ゆゝ俗子ふ厄せらまゝゝる
事悲夫ゝ記せり又曰五雜組魏の恵王ゞ徑寸の珠前後車
ゝ照こゝ十二乘の物むゝの事今天府ふも夜光珠いゆし
と明人謝肇淛ゞ五雜組ふいゝり。神異記。洞冥記ふも夜光
珠の支見えゝまゝども孟浪ふ属す古今注ふハまゞまて大ある
鯨の眼い夜光珠とゆゝといゝり卞和ゞ玉も剖之中果有玉とい
ハゞ石中ふ玉を孕たる事鍛冶ゝ碑ゝる玉卞和ゞ玉ふ類せるを
趙の恵王ゞ夜光の玉を秦の昭王ゞ城十五と以て易んとひゝハ

加嶌屋ゞ北国の明王を身上尽〳〵買んと約せ〳〵ふ類せり

さて又癸辛雑識続集巻下ふ機婦糸を水ふひ〳〵むきさるふ夜中白く大なる蜘蛛きこりてその水をのむふ身ふ光りをなるろかの婦人こまをを見て大ゐあゆ〳〵雑篭を罩てうの蜘蛛をとら〳〵ふ腹ふ夜光珠在ちき彈丸の如〳〵と云るせり坎事を前文ふ收之老人ゞ引くる北越奇談玉の部ふ越後よあり〳〵事こして

ぜ〳〵その事癸辛雑識ふ少〳〵もちがゞ子おゆゆふ癸辛雑識ハ唐本ゆて且又容易ふハ得ゞゞき昏ゆきバ北越奇談の作者俗子の目ふ奇をきりきんこてたゞむゆふ越後の事こして かきくるゞ〳〵ゞ〳〵ゞ〳〵ゞ

癸辛雑識続集ハ都下よゆ〳〵得がけ見べ本昏我見るゆゆゆゆゆゆゆゆゆ博識ふ傳閃ちるゆゆゆ

又増一阿含經算卅三。等法品第卅ふ轉輪聖王の徳ふそなたりこる一尺六寸の夜光摩尼宝ハ彼国十二由旬を照すとあり文多けるゆゆあげず蓋一由旬ハ異国の四十里ゆり十二由旬ハ日本道六十六里ゆり一尺六寸の玉六十六里四方と照をハ奇異とふ〳〵轉輪王此玉

と得て試ふ高き幢の頭ふ摩著けるふ人民等玉の光りともゆゆ〳〵夜の明〳〵りとおゆひゆ〳〵家業をそゞめくりと記せり此事碩学の聞高き了阿上人の語ふきこてかの經と借得て読〳〵ゞ夜光の玉の親玉ゆるゞき

餅花

餅花ハ夜ハ鼠ゞよ〳〵野山一ふねずみ目ふ入とあり とハ其角ゞきいのこずまふ了江戸ゆゞの餅花ハ十二月餅搗の時もちぞふ丸作り歳徳の神棚〳〵ゞるよ〳〵俳諧の季ふハ冬とす我国の餅花ハ春ゆり正月十四日までを大正月とゆひ十五日よりゆ日ゆまでを小正月とゆふ是我里俗の習せゆりさて正月十三日十四日のゆちふ門松ゆゆかゞりを取了拂ひ我国長岡ゆハ正月七日ふかゞりを十四日ゆでゆるる餅花と作り大神宮歳徳の神夷ゆの〳〵餅花一枝づ〳〵神棚〳〵ゞ〳〵その作り

剛夫得名玉図

やうにうづ木やうふ木あるひハ川楊の枝をとりこもふ餅と
三角又ハ梅桜の花形ふ切る紙かの枝ふさ〳〵あるひハ團子と
もまゝこしを蚕玉とゝふ稲穂又ハ紙ふて作りこる金銭縞あ
きびとゝるどいちごゝのひ形と紙ふて作り農家ふてハ木とけづり
て鍬鋤のたぐひ農具と小さく作りてもちゐるの枝ふのくるまぐ
ておのゝ〳〵ゝ家業ふあづかるものゝひふりこ田耕ることゝその業
の福といのるの祝事ありもちゐふを作るハおわりこつきものゝ
手業ふり祝ひとて男女ともうちまゝつて声よく田植哥とう
〳〵ふ此ことるとときけば夏ごひ〳〵家の上こす雪のたやくきえよ
か〳〵とおもふも雪国の人情あり此餅花ハ俳諧の古き季寄ふ
もいでこれば二百年来諸国ふもあるハ勿論ありちごろ江戸ふて
季ふよらず小児のこふ遊ふ作りあきまふときゝつ

斉の神勧進

我ゞ塩沢近辺の風俗ふ正月十五日まの〳〵七八歳より十三四までの
男の童ども斉の神勧進とふ事をふす少〳〵富家の童こまと
ふすふ補木を上下より削り掛て鍔の形を作ることと三棒
とふことと三本大ふ小さ〳〵上下とちゆく〳〵童僕ふ一外ますをもさ
せ又ハひもありてくびかゝるありその中へ五六寸だりの木を頭
だりり人形ふ作り目鼻とるゞき二つつくりて女神男神こ〳〵女神
ハかゝらふ綿をきせ紙ふて作りこる衣服ふ紅ふて梅の花ふで
るゞく男神ふハ烏帽子をきせ木とけづりこけて髭こす紙のい
ふこふ若松ふどるゞく此二ツ紙かの升の内ふおき斉の神勧進こ
とよびこりあり〳〵敢物の欲ふもあらず正月ふそびの一ツ
こゝと一人のこふあらず児輩ふのくもこる事ありこゝとふ与こるふハ

切餅あるひハ銭もとらふ又まづしきものハもらひづらハ五七人十人餘も黨をなし茜木綿の頭巾にあさぎのへりをとりたるをかむりかの斗棒找一本さしたるの二神と柳とりに入まて首にかけ「さいの神さまへかんじん銭でも金でもくれろくとおやまくと門々をおしありく又ハ銭をもらひあるくもあるひハ浊り酒などのませ顔に墨とぬりてもらひなどよろこびこれがおかしさずまゐるなりわらハせなり又長岡のほとりにていふの斗棒のけづりかけの三尺ばかりあるに宝づくしなどゑがきたるをさして劝進まいるこハ小児にあらまで大人のいやしきがわざなり劝進のことぞふ「せにでもかねでもおいやまこらいねんの春ハ嫁でも聟でもとるやうに泉のすこうらくやうにすツくらすまことおいやまくしがくして劝進の銭をあつめて斉の神を祭る入用とするなり
下まゐて又去年むこよめをとむかへる家の門に未明よりもらふども

大勢あつまりかの斗棒をもつて門戸を敲きよめをだせむこをだせと同音によばはりたはぶれこれを里俗の祝事とすまたいはふる家もなくこどもを入そて物をくれるもありかゝる俗習他国にもあるなるべし
○さて此事たあいもなき小どものたはむれとおもひしにまたくしからず醒斎京傳翁が骨董集を読て本拠ある事を発明せり骨董集上編下に粥の木の條に○粥杖○祝木○ねぢけ棒といふ物前にいひし斗棒に同じ京傳翁の説に粥の木とハ正月十五日粥を煮たる薪を杖として子もたぬ女のゑりをうちてハ男子をうむとていふ祝ひ事なりとて○枕の草紙○狭衣○弁内侍の日記その外くさぐさの書を引て上代の宮裏近古の市中粥杖の事を挙て考証甚詳なり今我が郡において斗棒ハ則いにしへの粥杖の遺風なる事を発明せり我国にも祝木あるひハ御祝棒といふ一所もありこれ七八百年前より

正月十五日よりする事京傳翁ゞ引まてる昏ゝくちらてありそのゝ
引昏の中ゝも明人の作日本風土記ゝあるハゝ明ゝも我国のゝく
似ゝう炊昏ハ今より三百年ゞろいぜんの日本の風俗を明人ゝ
聞ゝて昏ゝるゝものゝまゝハ今我国ゝく小童のたゝまゝとゝ
るゝ三百年ゞろいさゝの風俗遠境ゝもうつりのゝたるゝゝし
京傳翁ゝ引ゝる日本風土記巻の二時令の部ゝあり洪文の「但街道
郷村の児童年十五八九已上ゝ及ぶ者各柳の枝と取り皮をゝり
木刀ゝ彫成ゝ皮と以復外刀上ゝ纏ひ用火焼黒め皮を
去り以黒白の花を分つ名づけて荷花蘭蜜とゝふ再荊棘の
條を取香花神前ゝ挿供次ゝ集る各童手ゝ木刀と執途ゝ
隊伍凡有婚无子の婦木刀と将て遍身并之口ゝ荷花蘭蜜
と舎ふゝかゝゝず炊婦当年孕男と生我国ゝて児童等ゞ人の

門を手棒ゝくたゝき嫩をだせ聟をだせとのゝろゝけるゝくハ右の風
土記の俗習の遺事ゝあるゝゞ
百樹案ゝ件の風土記ゝ再び荊棘の條を取り香花神前ゝ挿
とゝいふ餅花を神棚へ供ぜる事を聞て粥杖の事と混錯
ゝゝく記ゝたるゝゞ狀りとゝれハ餅花も古き祝事ゝあり

○齊の神の祭

吾ゞ国正月十ゝ日ゝ齊の神のまゝりとゝふハ所謂左義長ゝあり
唐土ゝ爆竹とゝふ唐人除夜の詩ゝ竹爆千門の晌燈狀万戸明ゝあ
の句あゝゝて爆竹ハ大晦日ゝ焼る事ゝあり吾朝ゝてハ正月十五日
清涼殿の御庭ゝ青竹を焼き正月の昏始を炊火ゝ焼く
天ゝ奉るの又ゝて十八日ゝも又竹をかゞり扇を結びつけ同
御庭ゝ焼ゝ主ゝを祝事ゝせゝ王ゝ民間ゝもゝと学び

て正月十五日正月よりかざりたるものを焼すこと左義長
とて昔よりする事なりこれを斉の神祭りといふも古き事ふ
て爆竹左義長の故事俳諧の季寄年浪草ふ諸昏を引く
くまくまくいつて。吾う郡中ふ小千谷といふ所ハ人家千戸て
あまる饒地ありてもゆるふ斉の神の斉あるひハ幸にも盛
大ありこれをまつるふその町こふおの〳〵毎年さごめの場
所ありてその所の雪をふこうこめ中〳〵と三間ばかりふ
周〳〵たる高さ六七尺の四き壇を雪ふて作りこれふ二処
の上り階を作ることも雪ふてもる里俗呼て城といふ
壇の中央ふ杉のあま木をたて〳〵柱〳〵正月ばかりのあふ
くれとあくこの柱ふおもをびつけ又ハ積あげて七五三をもつて上
よりおもをびめぐ〳〵て蓑のこと〳〵ゆあ〳〵　坎頂ふ

大根注連といふもの〳〵左右ふ用る扇をつけ〳〵飛鳥の状と作て
つける壇の上ふハ席をまく〳〵け〳〵神酒をそなへ坎町の長ふるもの
礼服をつけ〳〵拝をなし〳〵所繁昌の幸福をいのる坎事をそなへて
きよめたる火を四隅より移して油滓ふて火のこゝろ易きゆゑ
なし〳〵ゆゑ煙々熾こと狀あるゆゑ世ふ火あり餅とゆきてこゝろふ病とのぞく
是則爆竹左義長あり他国ふてもある事あり或人の話ふ坎事
百余年前までハ江戸ふもありしが火災をそゞくるたゆふ禁下て
やゝこゝろこゞ〇さて又坎んべとつふ物を作りてこの左義長ふ翳て
火をこゝ〳〵せ焼を祝事とす坎んべハ御幣の訛言ありこの作り
やゝハ白紙と色〳〵こゝを数百枚つきあそこゝを細き幣束
のゆゝふきりさげをもふ扇の地紙の形をきりのこゝてこゝを
数千あつめて青竹をこゝしこゞ寸大小長短ハ作る家の意ふ

斎の神祭事の図

ゆゑ世人あるを以て人ふ誇る棹の赤ふひらきこ扇四ツをよせて扇わい家の紋をでいろ〳〵ろ〳〵ぐ〳〵いろ紙ゑて作るものゆゑ甚こ美事ありこまを作りてまづおのゑ〳〵ぐ門へ建おく事五月の幟のあつらひあり十五日ふいくりてかの場所へかちゆき左義長ふかざ〳〵く焼捨るを祝ひと〳〵慰こゑて現る人群を成すハ勿論事をそりてハ〳〵の〳〵ゑて喜酒の宴をひら〳〵こまてこれ　國君盛德の餘澤あり他所ふも左義長あゑどこもまづハ小千谷を盛大と寸

一白樹曰余京水をゑこぐ〳〵越後ふ遊び〳〵時此小千谷の人岩淵氏牧之老人の親族あり の家ふ節をとゞめ〳〵る事十四日八月あゞの嗣子廿四五許号と岩居といふ昏をよゑて余ふ遇せ〳〵ことを甚篤小千谷ハ北越の一市会商家鱗次とゑて百物備ざること〳〵海を去る事僅ふ七里ゆゑふ魚類ふ乏しからず

余塩沢ふあり〳〵ハ四十余日其地海ふ遠く〳〵て夏ハ海魚ふ乏〳〵江戸者の口ふ魚肉の上らざり〳〵事四十余日小千谷ふいく〳〵えじめて生鯛を喰せ〳〵ふ美味あり〳〵事いふべからず又鮭の時節ふ〳〵小千谷の前川ハ海ふ朝ゑるの大河ゑれハ今捕〳〵をもぐふ庖丁ゑて味ゑひ江戸ふまされり一日鮭をてんぷらとゑふ物ふ〳〵てぐせり余岩居ふむかひこゑるハ此地ふ〳〵ふ名を何〳〵ふぞと問ひ〳〵ふ岩居これハテンプラとゑふあり我ゑ〳〵ゑ此物の名義曉〳〵ぐ〳〵古老ふたづねこれどもゑる人さらふゑ〳〵先生の説をきくんとゑふ余答てまづ食終てテンプラの来由を語り〳〵ゑひて鮭のてんぷ〳〵と飽ゑぞふ喰せり

○てんぷらの説。煉羊羹の起原

岩居ふ語て曰今をさる事五十余年前天明の初年大阪

ゐく家僕四五人もつゝゐやどの次男年廿七八だろう利助とゐふものその身ようとーの三もう(の哥妓をつれて山奔ー江戸ゐ下り余ゞ家の京橋南街第一街對ひの裏屋ゑ住ーゐ一日事の序ゐよりて余ゞ家ゑ来アーより常ゑ山ゑ入ーて家僕のやうゑ使ゐだきせけるゐ花柳ゑ身を果ーさるものゆゑをもおもーろく才ゐあるーくよく用を弁ぎるゆゑをつき人ゑ銭ゞなーとて亡兄をたゞもとめをいそきある月利助いつやう江戸ゐハ胡麻揚の辻賣多ー大阪ゑてハつけあげとゝ魚肉のつけあぎハうゆきものゐり江戸ゐハいまゞ魚のつけあげと夜ゑせゐふる人ゐーわをこれをうらんとおもゐゐゐん亡兄京傳いそくそれハよきおゆひつきありまゞうろむゞーとて俄ゑ調ゞさせーゐいろゐも美味ゐり利助をくゐをを夜ゑせの辻ゐうんゐふゐの行灯ゑ魚のごゆあげをる

さんもあゆとやらまもろゞゐーあゆとる名をつけ〳〵玉ゐをとをひけをバ亡兄ゐゞゐらくゐあんーて筆をとり天麩羅とかきくゐをせゐれバ利助不審の見をゐる〳〵天麩羅とハいゐゐる所謂ゐうとゐゐ亡兄ゐちゐをゐつ〳〵足下ハ今天竺浪人ゐりゞゐーりと江戸一きゐりて賣創る物ゆゐゐふ天ゐちゐり是ゐ麩羅とゐ字を下しゐゐ〳〵麩ハゐ麦の粉ゆてつゐる羅ハうをてゆのとゆも字ゆり小麦の粉のゐ寸ものをうけゐをゐゐゐゐゐ夏ゐりと戯言ゐをけをバ利助も洒落ゐる男ゆゐ天竺浪人のゞゐつきゆゐ天ゐ〳〵ハおりーゐ〳〵と大ゆよゐゐびゆゞて此店をいゞをて時あんどんを持きゐりて字をゐ〳〵ゆゐ余ゞをきゆき時天麩羅と大昏ーて午一ゐ此てんゐ〳〵一ゐ四銭ゆて毎夜ゐりきゐ〳〵程ゐりきて一月もたゞゐゐゐゐゐ近辺所ゐをてんゐらの夜ゐせゐで今ハ天麩羅の名油のゞゐく

世上に傳染せしより此小千谷までもてんぷらの名をとなふる事一奇
事となりぬされども京傳翁が名づけ親にて利助が賣そめ
たりといへるを碩学鴻儒の大先生もしらずてんぷらの講
釈あるは天下に我一人なりとたかぶりけれバ岩居も手をうちて
笑ひたり○先年此てんぷらの話を友人静盧翁に語りしに
翁ハ和漢の博達時鳴の聞人なり 翁曰事物紺珠 明人黄一正作廿四巻 夷食の部にてんぷらに
似たる名ありきといはれしゆゑ其書を借りえてよく見しに○塔
不剌とありて注に○葱○椒○油○醤を熬後より鴨或ハ雑○
鵞といふを慢火にて養熟とあり蟹とあぶらげにまぜるに見えたり
○さて天麩羅の播布に類せる事あり因に記す○橘菴漫筆に
享和元年京の田仲宜作「京師下河原に佐野屋嘉兵衛といふもの享保
年中長崎より上京して初て大碗十二の食卓を料理し

弘めたる是京師浪花に食卓料理の初なりとぞ嘉兵衛娘たんとい
つるもの老婆となりて近頃まで存命せり則今の佐野屋祖な
り大坂にもくだりこれ食卓料理あまねく弘りたれど野堂町の貴
徳斎など久しくつゞきてあるめり」岩居がてんぷらをふるまひたる
夜その友蓉岳来て 揚なといふ菓子や 余が酒をこのまざるを聞て家製に
つくりて煉羊羹を恵ぬ味ひ江戸に同じ余越後にねりやうかんと
賞味して大に感嘆し岩居に謂曰此ねりやうかんも近年のもの
なり常のやうかんにくらぶれバ味ひまされり吾がをさなきころハ常
のやうかんすらめづらしきものにて口にハ入らざりしに江戸をさる事遠き
此地にも出来逢のねりやうかんあるハ実に大平の徳化なりといひ
しに蓉岳も昼画をよくし文事もありて好事ものなれバことばと
きゝてひざをすゝめ菓子ハ吾が家産なりねりやうかんと近来の

かのこみ由来を示し玉へといふ余こゝろえてしるす○寛政のはじめ
江戸日本橋通一町目より町字を式部小路といふ所に喜太郎
とて夫婦に丁稚ひとりをつかひ菓子屋とは見えぬ格子造に
かんばんもかゝげず此喜太郎いぜんハ　貴重の御菓子を調進
もする家の菓子杜氏なりしが奉公をやめてこゝに住し極製の
菓子ばかりをせいして茶人又ハ富家のこのみにのみ応じて此者
が工風にてはじめて煉羊羹と名づけてうりけるに羊羹本字ハ羊肝なる事秘苑日鈔に見ゆ
て喜太郎がねりやうかんとて人々めづらしがりてもてはやしぬれ
ども一人一手にてせいするゆゑけふはうりきらしたりとてつかひの
重箱空しくかへる事などもありこは余が目前見たる所なりかく
て一二年の間に菓子や二軒となる喜太郎をまねてねりやうかんを
せいしそれゆゑにうりしに今ハ江戸の菓子やいさゝかなり追て弘り此

小千谷にのみかぎらず此国に市会とよぶ所々にもあるべく又
諸国にもあるべしといひしに蓉岳よろこびて小倉羹とあり八重な
つきんかなりあまたいまねがはずてとくこれらの事雪譜の名に
ハ似気なき弁なれど本文小千谷のはなしにおもひいだしたれバ
人の話柄に記とりあへず近古食類の起原さへあれど余が食
物沿革考に上古より挙てあれバこゝにはいはずせり

雪中の狼

初編にもあらはしたるごとく我国の獣各にいへば山を踰て雪浅
国へさることもはなしもて食にともしきゆゑ春にいたるまで
もとの棲へかへるさまも雪にはゞかれてえざる也然ども食にたらずとて
ふしい夜中人家にちかよりて犬などをとりて又人にかゝる事もありこれを
山村の事なり里にハ人多きことなれバおそれてちかよらずやや雪中に

雪中狼入人家圖

北越雪譜 巻之二

穴居もるハ熊のごとく熊ハ手に山蚁をもりつけこれをなめて穴居の食とするよし いひつゝ。こゝは我郡中の山村ハ（不祥のことゝもハ地名人名をもとゞむ）

まつしき農夫ありけゝ老母と妻と十三の女子七ツの男子ありけり妖

農夫性質篤實にして よく母をうやまひ二月のもち物用ありて二里ばかりの所へいくらんとすれ山道あり母いとく山あるゝれハ用心あり筒をかてとつゝ実はかりとして鉄炮をもちゆきたりこれハ農業のかたわら獵をもなすゆゑ国許の筒ありかとてもゝ不ず時ゝ

つゝ日も暮かゝる既りこもちゆゑて吾が村へ入らんとする雪の山蔭ハ狼物を喰ふを見つけ矢頃よねらひ火蓋をきりしふあやまゝずうちおゝぬちゝうこれいとゝひゐるゝハ人の足あり農夫ハおどろきさてハ村ちゝくきつるゝらんと我家をさがひ狼いとのあふゝてもせりしふ家のまへの雪の白きふ血のく

ゝまるゝ所をあらつゝるよりまつすぐおどろきさせりけるとバ狼二足逃きりけゝ所をこれバ毋ハゐるゝのまへゆゝうこゝひちゝさゝと片足いくひとらもてもゝゐるゝうり妻ハ凶のもとふ喰伏られあゝゆゝこゝのかゝゝふちゝごこの毋ゝごふゝもちゝたるさゝゐゝり七ツの男の子ハ庭ふありてかゝゝ半ハ喰もとうり妻ハもとこゝひきありて夫をこゝろよりおきゝゐゝらんとゝてちゝらおよゝず狼ゝゝひゝゝゝだゝりふてたゝまゝゝけり農夫ハゆゝゝもうつゝもゝきゝゐゝず鉄炮をもて立あゝりゝゝゝゝるふてもゝ娘いとゝてゝきゝゝるゝよびけるゝで床の下よりそひいで親ゆゝこゝりつきこゝるゝをあげてふゝおやゝもむすめをいゝきゝてゝゐきけり山家ハ住居もゝゝかゝゝこゝゝゐゝゝあゝゝのゝゐゝこゝゝゝの事をきゝゝのゝゝあゝりけゝ農夫ハ時の間ゝ六十の母三十の妻七ツの子と狼の牙ふゝゝゝゝゝゝ歯ゝゝゝとゝゝて口をゝゝり親ゝふゝゝりゝゝゝゝゝゝ

声をあげてあきおくり村のものやうくふきつけきつう然体
とこておろきちけびくまびれいくあつまりきつう娘よやう
きとたづねくまび凶とやぶりて狼三疋をせりーづこーい竈
ふ火とたきてゐうしやゐもぐふ床の下へあげ入りぞきゐと母さま
とおとうあくてゐんときて念仏中ておうとふくて共ありきゐと
いつづき所へつげきらせ次の日のクぐまと棺一ツよ妻ー童とをさ
め母の稽と二ツ野辺おうとあーるふ涙そそぐざるものいなくう
けるとでおゐつるもうぐ筒をかてといひゐゐ母の片足と雪の山
蔭ふうらひゐる狼をうちおーて母の敵いとうくれど二疋とゆら
きーふいふ口惜りくんこまとりのち此農夫家と棄娘とつま
て順礼ぞでうちきるゆるれば人のよくきるたあーあう
百拇日日本の狼ハ幻化事をきくす唐土の狼ハぞけること

老狐ゆことあーす宋人李昉等ゞ太平廣記畜獸の部ふ四百四十二巻狼美
人ふ幻化て少年と通じあるひ人の母ゆぞけて年七十ゆりて
ちぐめてだけをあらきて逃さり又ハ人の父を喰殺ーてその父
ゆぞけて手を歴くるふ一日その子山ふ入りて来と採るふ狼き
たりて人の如く立其裾を銜くるゆ爺ふ〳〵狼の額と斫狼
ゆげ去りーゆる家ゆのつりーふ父の額よ傷の痕あるを視て狼
あることとさとりこをを殺きふ果ーて老狼ゆり親をとろーくる
ゆる自縣ふいくりて事の由をつげくる事ゆぞ。廣異記。宣室
志を引てもるせり悍悪の事ふ狼の字をいふもの。殘忍ある
と豺狼の心とゆひ。声のおそろーきと狼声とゆひ。毒の甚
きを狼毒とゆひ。事の猥と狼と。反相ある人と狼顧。
義无と中山狼。恣ま食と狼食。病烈を狼疾とゆひ。狼

籍○狼戾○狼狽あゞ皆彼よ譬て是をつゝあり 文海抄さゝゞい
獸中最可悪ハ狼あり余竊よ以為狼ハ狼中て狼なゝ
ども人ゝて狼あるハよゝ狼をつゝすゆゑ狼あるを
こせずこゝゞるよ狼毒をこゝる人あり人の狼あるを
狼の狼あるよりも可惧可悪篤実を外面とゝ奸慾を内
心ゝゝると狼者とゝひ娵を悍戾を狼老婆とゝよ巧よ狼心
をゝゝすゝも識者の心眼ハ明鏡ありおゝゝゝ埴ざら
んや恥ざらんや

北越雪譜中巻終

島田藏書